

日本天文学会 早川幸男基金による 渡航報告書

Multi-Wavelength Observations of Coronal Structure and Dynamics —Yohkoh 10th Anniversary Meeting

2002年1月21日から24日に、ハワイのコナで行われたようこう10周年国際会議に出席しました。ようこうは1991年8月に打ち上げられた太陽観測衛星で、昨年8月に打ち上げ10周年を迎えました。今回の国際会議は、その打ち上げ10周年を記念して開催されたものです。10ヶ国以上130名以上の参加者があり、この10年間のようこうによる観測成果・発見が報告されました。もちろん、日本からも大勢の参加者がありました。ちなみに、参加者の中で科学館や公開天文台など社会教育施設からの参加者は私ただ一人でした。

この国際会議、大学院時代からようこうに関わってきた私としてはぜひとも参加したいものでありましたが、地方の公開天文台で働く身としては、海外渡航の費用など出るわけもなく（しかも、ハワイ渡航中は出張扱いではなく義務免除扱いなるもの）旅費をどう工面しようかと思いました。そこで思い切って早川基金に応募することにしました。思い切って、というのは、私の場合、高年齢（35歳年齢制限ぎりぎり）、サイエンスの発表ではない、しかもポスター発表と、早川基金の応募には不利な要素ばかりに思われたためです。しかし、これが応募の最後のチャンスとばかりに応募したところ採択されました。公開天文台関係者での採択者は私が初めてです。

実はこの会議は昨年9月に行われるはずのものでした。しかし、アメリカ多発テロの影響のため、この1月に延期されたものです。従って、会議冒頭には会議参加者全員による黙祷により始まりしました。

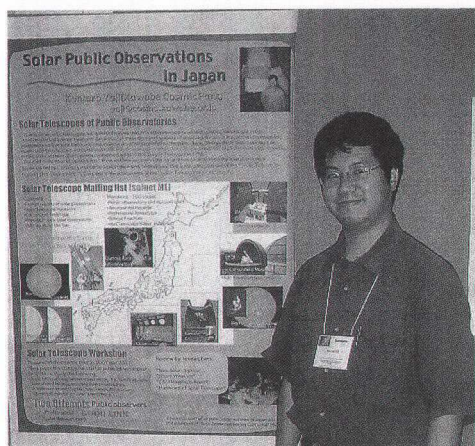
会議では、「静かな太陽」「活動領域とブライトポイント」「シグモイドとヘリシティ」「太陽活動

周期」など様々なトピックに従って、セッションが進行していきました。特に太陽フレアの関係では、「フレアにおけるリコネクション」「フレアの微細構造」「プリフレア現象」「フレアの高エネルギー現象」などなどいくつかのセッションに分かれていました。これは太陽フレアにおける注目すべき問題が多岐に渡っていること、ようこうによって解明された太陽フレアのことだらけが多いことを表しています。私自身、太陽フレアの研究を継続していることもあり、これらの発表は非常に刺激に満ちたものでした。また、教育普及に携わる身として、この成果をあらゆる機会を通して広く伝えていきたいと思いました。

このほか、日本に何度も足を運んでいる外国人研究者や、海外でポスドクなどで武者修行中の知人・後輩たちなど、久々になつかしい方々に会うことができました。しかし、1日中会場に閉じこもっているの、太陽の研究会に出ているのに太陽が見えないとはこれいかに？という感じでした。

今回、この会議では以上紹介したセッションのほかに、「教育とパブリック・アウトリーチ(Education and Public Outreach)」に関するセッションがありました。このような国際会議で、教育関係のセッションが設けられた話は記憶にありません。非常に珍しいセッションと言えます。そこで、当初、会議主催者にこのセッションがどんな内容か問い合わせてみたところ、「ようこうの観測成果を一般の人々に伝えるためにどのような取り組みをしてきたか、またそのためのアイデアを情報交換するのが目的だ」という返事が返ってきました。そういう内容であれば私も発表可能な話題があると伝えたと、こ、「ぜひ発表してほしい」という返事が返ってきました。

このセッションは、上で触れた他のサイエンスのセッションと同じ扱いで、国際会議初日の21日の午後にプログラムされていました。会議の出席者も抜け出すということではなく、ほぼ全員が出席していたように思います。セッションの核となる招



ポスターの前で



会議の様子

待講演では、ロッキード・マーチン研究所のトム・メトカーフ氏（主著者は同じくロッキード・マーチン研究所のデビッド・アレキサンダー氏）が「YOHKOH: A Decade of Discovery」という題で講演しました。具体的内容は、Webを活用したようこう画像や映像の公開、SolarWeekやSun-EarthDayと呼ばれるイベントの取り組み、教育関係者と協力、教育用コンテンツの開発など多岐にわたっていました。とにかく、非常にアウトリーチ活動への熱意が伝わる内容で、研究者に積極的なアウトリーチの呼びかけを行っていました。海外の研究機関ではこの手の意識が非常に高いと言えます。講演後も活発な議論が行われました。このセッションでは、この招待講演と合わせて、口頭発表が2本、ポスター発表が5本ありました。私は、日本側のただ一人のこのセッションでの発表者で、「Solar Public Observations in Japan」という題でポスター発表を行いました。訳すと「日本の公開天文台の太陽観測」ということで、題通り、日本の公開天文台の太陽観測事情、私が運営している太陽望遠鏡メーリングリスト、過去2回行った太陽望遠鏡ワークショップの取り組みなどを紹介し、日本の太陽観測に対して、公開天文台がいかに貢献しているかを発表しました。ポスター会場では、何人かの外国人研究者が興味を持ってきて、積極的にポ

スターの説明を行いました。他のポスターでもNASAやカリフォルニア大バークレーなどの研究機関での熱心な実践が発表されました。これらの発表も私にとって非常に刺激になるものでした。日本でもこのようなパブリックアウトリーチの取り組みが進むことを期待します。

1月25日・26日には引き続き、SOLAR-Bサイエンス会議に出席しました。SOLAR-Bは2005年に打ち上げ予定の太陽観測衛星で、ようこうの後継機にあたります。この会議中でも、観測データの取り扱いにおいて、アウトリーチの側面からのコメント・議論がなされました。

ほかにマウナケア山頂のすばる望遠鏡のエキスカッションなど報告すべき（したい？）話題はいろいろあるのですが、紙面の都合により割愛したいと思います。

最後に、この10年間、ようこうチームに関わり、すばらしいデータに触れることができたこと、その観測成果に貢献できたことを誇りに思います。

そして、私のような公開天文台に勤めるものにも海外渡航の援助の機会を与えていただいた早川幸男基金に深く感謝いたします。

矢治健太郎（かわべ天文公園）